

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-12

第三節養子

(発行年 / Year)

1910

第三節 養子

(理由) 本節ハ他人ノ收養ニ依ル親子關係即

チ養子ニ関スル規定ニシテ既成法典人事編

オ七章及ヒ第八章ニ合シテ之ニ修正ヲ加ヘ

タリ既成法典ハ親子關係ト養子關係トヲ全

然分離シテ之ヲ別章ニ規定スト虽モ此兩關

係ハ自然ニ出ツルト收養ニ係ルトノ區別ア

法典調査會

ルノココニシテ世ニ親子關係ニ外ナラサルヲ

以テ本案ハ養子ト養子トヲ區別シテ共ニ之

ヲ親子ニ關スル本章ノ下ニ規定セリ而シテ

既成法典ハ養子縁組及ヒ養子離縁ニ關シ各

一章ヲ設クト虽モ此等ハ世ニ養子ニ關スル

規定ノ分類タルニ過キザンモノナシハ本章

ハ之ヲ本節ノ下ニ纏括セリ其他既成法典ハ
養子縁組ニ関スル一章ヲ六節ニ分チ又養子
離縁ニ関スル一章ヲ分チテ三節トシ巧ニ規
定ノ分類ヲ為スカ此トモ至モ實際其必要ナ
キノミナラス斯ノ如キ細則ハ却テ法條ヲ錯
雜ナシラムル弊アルニ因リ本條ハ本節ヲ分
チテ四款トシ縁組ノ要件、無效及ヒ取消、効力、
及ヒ取消、効力、離縁ニ関シ順次其規定ヲ掲ゲ
カシ)

養子制度ノ存廢ニ存テハ學說及ヒ立法論ハ
固ヨリ一ニ帰スルニ非ス或ハ養子制度ハ人
倫ヲ亂タズ弊アリトシ或ハ婚姻ノ妨害ヲ為

ニ慮ヲトシ或ハ相統權遺留分等ヲ害スル
恐アリトシテ之ヲ攻撃シ之ヲ排斥スル學說
及ト立法例ハ敢テ少カラスト雖モ人類進化
ノ或程度ニ於テ養子又ハ其ノ類似ノ制度カ
人類ノ生存社會ノ組織ニ必要ナリトコトハ
疑ハ容シサハ所ニシテ現ニ今日ニ於テモ種

法典調査會

々ノ理由ニ因リ其必要ヲ感スルモノナシハ
各同多クハ養子制度ヲ認メ殊ニ杖同ノ如キ
ハ家ヲ以テ社會ノ基礎ト爲スニ因リ養子制
度ノ必要ヲ感スルニト一層甚シク夙ニ此制
度ヲ認メ治リ此凡智カ行ハシタルモノニシ
テ今日ニ至リ敢テ必要ノ程度ヲ減シタルニ

非ス故ニ本業ハ固ヨリ養子制度ヲ保存スト
虽モ之ニ伴フテ祭生スル所ノ榮室ニ亦決シ
テカカリサント固リ務メテ之ヲ矯正スル豫
防スルニトモ注意セリ蓋シ養子制度ヲ立ツ
ルニ當リテハ其根本ノ主義ニ於テ寧ニ家督
又ハ財産ヲ相続スル必要ニ應セシメントス
ル趣旨ニ基ツリト自然ノ親子ニ模倣シテ養
子ト養親トノ間ニ親子ノ關係ヲ生セシメン
トスル趣旨ニ基ツクトノ差遠ニ因リ自ラ法
律ノ規定ヲ显ニセサルベカラスト虽モ必竟
養子縁組ニ因リテ親子ノ關係ヲ生セシムル
モノナレバ至トシテ自然模倣ノ趣旨ニ従フ

ベキハ其當ラ得タルモノト認ムルニ因リ本
業ハ此主義ニ依リテ立案セリ其他養子ヲ為
ス目的ハ種々ニシテ或ハ祖先ノ祭祀ヲ継続
スル為メニシ或ハ家督相続又ハ財産相続ヲ
為サシムル為メニシ或ハ慈善安撫ノ為メニ
シ或ハ家族生活ヲ盛ナラシムルカ為メニシ

法典調査會

ハ如ク決シテ一樣ナラストモ斯ノ如キ差
違ノ存スル所ハ即チ養子ノ間ニル規定ヲ設
ケルニ當リ宜シク斟酌ヲ加フニキ要點タリ
ベシ例ハ祭祀継続ノ為メニ養子ヲ為スモ
ノトセハ養子ハ必ス血統者ヨリテ之ヲ收養ス
ベシト為スヲ以テ至當トスベリ又家督相続

法典調査會

ノ為メニ養子ヲ為スモノトセバ戸主タハ賢
 格ニ相劣スル者ナレバ之ヲ養子ト為スコト
 得ベク且斯ノ如キ養子ハ室子又ハ他ノ養
 子ノ存スル以上ハ之ヲ許サザルヲ以テ其当
 ヲ得タルモノト云フベク又財產相續ノ為メ
 ニ養子ヲ為スコトヲ許スニ就テハ之レカ為
 ナレ但族裔ノ利益ヲ害セサテ之ムルコトウ
 要スベク又慈善愛憐ノ為メ或ハ家族生活ヲ
 盛ナラシムル為メニ養子ヲ為スコトヲ許ス
 ニ於テハ養子ハ家人タリトモ之ヲ為スコト
 ヲ認メザルベカラザレシカ如ク現ニ既成法典
 ノ如キト宗智相續ヲ為サシムル為メニ養子

ヲ考スモノナリト、熟考ニ基テリ。因リ既ニ相続人ノ存スル以上ハ養子ヲ為スコトヲ得サレ、昔ヲ規定セリ。然レトモ前述談種ノ月の中、或目的ノミテ重キヲ置キ之ニ因リテ養子制度ヲ立ハシムコトハ今日ノ人情風習ニ適セズ又敬テ目的ノ範圍ヲ制限シテ規定シテ教ヘサルハ方カラザル理由ナキヲ以テ本條ハ總テノ目的ヲ補助シ實際ノ必要ニ適セシムコトスルヲ以テ立法ノ本旨ト為セリ。

第一款 縁組ノ要件

(理由) 本條ハ養子ヲ為ス者及ヒ養子ト為ル者ノ資格其他縁組ノ方式ノ如キ總テ養子縁

組に必要ナル法定ノ條件ヲ規定スルモノニ
シテ主トシテ既成法典ニ事編中七章第一節
及レ初二節ニ修正ヲ加ヘタリ而シテ其學ニ
縁組ト云フ所以ハ殊重ニ養子縁組ト云ハガ
ルニモ詮解ヲ生スル處ナケレハナリ
勿八百四十條

法典調査會

(理由) 本條ハ養子ヲ為ス者ノ年數ニ関スル
規定ニシテ既成法典ニ事編第百二條第一項
ト同一ノ趣旨ニ基キリモノトス蓋シ現今ニ
テハ養子ヲ為ス者ノ年數ニ付テハ別ニ制限ナ
ク戸主幼稚ナルカ故ニ年長者ヲ養子ト為ス
コトヲ許セシ指合等願人多シト雖モ我同志

未ノ制例ヲ親ハニ或ハ男女共ニ婚姻年齢ニ
達スルトキハ養子ヲ為スコトヲ得トシ或ハ
相當ノ年齢ヲ指定シテ養子ヲ為ス者ノ要件
タラズメタル例ナレトセス而シテ之ヲ外國
ノ立法例ニ徴スルニ甚多數ハ養子制度ヲ以
テ養子ナキカ將々之ヲ失ヒタル者ヲ憫ムノ

法典調査會

趣旨ニ基ツリモリトシ從テ通常養子ヲ奉リ
ルコト能ハサハ年齢ニ達スル者ノミラシ
テ養子ヲ為スコトヲ得セシムル主義ニ基ツキ
四十歳乃至六十歳ノ年齢ニ達セサレハ養子
ヲ為スコトヲ得サレラ以テ通例ト為スモノ
ノ如ク然レトモ本條ハ固ヨリ罕ニ養子ナキ

者ヲ憫ミテ養子制度ヲ認めんニ至リタルモ
ノニ非ナレバ歐洲諸國ノ多數ノ立法例ノ如
ク縁組ノ要件トシテ殊更ニ養親ノ年齢ヲ高
リ指定スルコトヲ要スル理由ナシト虽モ縁
組ト一身一家ニ取リテ重大ナル關係ヲ有ス
ルモノナレバ未ダ成年ニ達セザル者ヲシテ
隨意ニ養子ト爲スコトヲ得セシムル如キハ
頗ル危険ニシテ立法上其當ヲ得タルモノト
云フコトヲ得ナレバ因リ亦余ハ寧ニ改立法
典ノ立法主義ニ從ヒ成年ニ達セザル者ニ非
サレハ養子ト爲スコトヲ得ストシテ之ニ依リ
テ養子制度ノ目的ヲ達セシムルト同時ニ濫

リニ養子ヲ爲シテ事ヲ終ルノ弊ヲ豫防セリ
次ニ亦条ハ成年ニ達セザル者ト何人ト案モ
養子ヲ爲スコトヲ得ベキコトヲ認ムルモノ
ナレバ我同古代ニ行ハレタルカクキ男子ニ
非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得エト云フ立法
主義ハ固ヨリ本案ノ採用セザル所トス殊ニ
亦案ハ養子ヲ爲スコトヲ存スル所ノ總テ
ノ目的ヲ斟酌シテ養子制度ヲ立ツルモノナ
レハ既成法典人事編第百九條ノ如ク單ニ戸
主若クハ推定家督相続人ニ非サレハ養子ヲ
爲スコトヲ得ズト云フ立法主義ヲ採用セズ
蓋シ既成法典ニ家督相続ノ必要上養子制度

の認めし、因り右、述ブル如キ現存の掲ぐ
 ルに至りたりト云々從來ノ慣例ニ徴スルト
 キハ主戸ニ非サル者ト云々養子ヲ為スコト
 得ヘリ殊ニ承継ノ如ク慈善愛憐ノ為メ或
 ハ家族生活ヲ盛ナラシムル為メニ養子ヲ為
 スコトヲ禁セサル立法主義ニ從フ以上ハ何
 人ト云ハ成年に達シタル以上ハ養子ヲ為ス
 コトヲ得セシムルヲ以テ至當トス只々家族
 が養子ヲ為サントスルトキト之レ更ニ戸主
 ノ家族ヲ増加セシムルモノナレハ養子ヲ為
 サントスル家族ウコテ戸主ノ承諾ヲ求メシ
 ムルヲ以テ至當ト認めルニ因り第七百四十

養子トナスコトヲ許スモノトス

第四百四十一條

(理由) 亦條ハ年長有ツ養子ト為スコトヲ禁

スルモノニシテ或成法世人事編ヲ百六條ノ

一部ニ字句ノ修正ヲ加ヘタルニ過キニ

第四百四十二條 何人トモ其尊屬ヲ養子ト

為スコトヲ得ス

(理由) 本條ハ尊屬而養子ヲ禁スルモノニシ

テ既成証世ニ其例ナシト雖モ服穆ノ序ヲ保

ツモ必要ナルヲ以テ本案ハ新ニ之ヲ加ヘリ

リ蓋シ家督相續ノ上ヨリ見ルトキハ他人ヲ

エテ相續セシムルヨリモ親族中ヨリ相續ヤ

シムルヲ以テ妾當ト為スノニナラズ伯叔父

法典調査會

母ガ却テ其甥姪ヨリ年少ナルコトハ實際上

厚見ル所ナシハ尊屬者ト雖モ之ヲ養子ト為

スコトヲ許スノ至當ナルヲ感セシムト雖モ

蓋シ果シテ斯ノ如クナシハ尊卑ノ倫序ヲ乱

ススコ至ルハ更ニ言フヲ俊々サル所ニシテ

從來ノ慣例モ亦尊屬者養子ヲ許サザルモノ

ナレハ本條ハ即チ本條ノ規定ニ依リテ此契
旨ヲ明テセリ

第八百四十三條

理由 本條ハ推定家督相続人ノ利益ヲ保護
スル契旨ニ基ツキモノニシテ改定法典人
編百七條ニ修正ヲ加ヘタリ蓋シ本條ハ縁

法典調査會

組ノ要件トシテ養親ニ子ナキトシテ必要ト
セザルノミナラズ在来ノ慣例及ヒ養子ヲ為
ス目的ヲ斟酌シテ孰ラ教人ノ養子ヲ為スコ
トヲ禁セ又且養子ハ固ヨリ養男トシテ養女
トシトテ問ハサル所ナリト虽モ養子ヲ為ス
コトニ固リテ濫リシ推定家督相続人ノ利益

ヲ實スル如キハ法律保護ノ必要ヨリ見ルモ
亦家ヲ重ニスル立法ノ本旨ニ照ラズモ豫メ
之ヲ防止スルコトヲ要ス而シテ既成法世ハ
養子制度ヲ以テ單ニ家督相続ノ必要ニ基ク
ルモノト爲ス趣旨ニ因リ家督相続ヲ爲ス可
キ男子タシ否ハ養子ヲ爲スモトリ得ザル旨
ヲ明示ストモ亦其ハ既ニ立法ノ根本ニ於
テ既成法世ト其趣旨ヲ異ニスルノミナラズ
既成法世ノ如ク單ニ家督相続ヲ爲スヘキ男
子アルトキト云フニ於テハ家督相続ヲ爲ス
コトヲ得ヘキ者ノ範圍ハ頗ル廣濶ナルカ故
ニ未ダ指定家督相続人タラザル者ノ存スル

ニ因リテ養子ヲ為スコトヲ得サル結算ヲ生
ズ即チ制限ノ範圍廣キニ失シテ甚當ヲ得サ
ルニ因リ本案ハ推定家督相続人ノ存スル場
合ニ限定セリ然レトモ既成法典ノ如ク家督
相続ヲ為スコト希カ男子タル場合ニ限ルハ
女子コレテ家督相続人タル者ノ利益ヲ保護
セザルモノト云ハザル可カラザルニ因リ本
案ハ推定家督相続人ノ男子タルト女子タル
トノ向ハス苟モ之ヲ有スル者ハ更ニ男子ヲ
推定シテ養子ト為スコトヲ得ストレ以テ一
般ニ推定家督相続人ノ利益ヲ保護セリ而シ
テ本案ノ以場合ニ於テ殊更ニ男子ヲ養子ト

為スコトヲ得スト別ニ女子ヲ養子ト為ス
コトヲ禁セザン所以ハ推定家督相続人アリ
者ヲ更ニ女子ヲ養子ト為スモ敢テ推定家督
相続人ノ利益ヲ害スル虞ナキノミヤク又女
子ヲ婚嫁セシム便宜ノ為人總善養儀ノ為
ニ推定家督相続人アル者トモニ女子ヲ收養
ニテ養女ト為スコトハ實際上帝ニ行ハルハ
所コレヲ別ニ何等ノ弊害ヲ生セシムル虞ナ
キニ因ルモノコレヲ改定法典ノ如ク廣ク養
子ヲ為スコトヲ禁スルニ於テハ家督相続ヲ
為スヘキ男子アリ者ハ女子クモ養子ト為ス
コトヲ得ザンガ如キ不當ノ結果ヲ生セシム

ハモノトテウベシ

推定家督相続人アル者ハ男子ヲ養子ト為ス

コトヲ得サルヲ以テ本則ト為ストモ推定

家督相続人カ女子ナルトキハ之ニ對シテ婿

養子ヲ為スコトヲ許ササル可カラサルハ勿

論ニシテ推定家督相続人ノ妹ニ婿養子ヲ為

法典調査會

スカ如キモ亦三ヲ禁スル理由ナシ是レ即チ

本條ハ婿ニ但書ノ規定ヲ設ケ婿養子ヲ為ス

場合ヲ除外セル所以ナリ

第八百四十四條

(理由) 本條ハ後見人ヲ以テ管理計算ノ義務

ヲ盡サシムル者トシテ設ケタルモノニシテ

改成法典人事編第九條ニ字句ノ変更ヲ加
ヘタシニ過キズ

第八百四條

(理由) 本條ハ夫婦養子ノ場合ニ関スル規定
ニシテ既成法典人事編第九條ニ修正ヲ加
ヘタリ蓋シ婦ハ其夫ニ隨フヘキモノナレバ

法典調査會

他人ノ養子ト為ルコトヲ得サルハ勿論ナリ
ト同明ニ夫ノ姓氏分限等ハ總テ其婦ニ及ブ
テノナレハ夫々其婦ト分辯シテ隨意ニ他
人ノ養子ト為ルコトヲ得サルト至當ノ事ナ
ルニ因リ配偶者ナシ者ハ他人ノ養子ト為人
ニハ其配偶者ト一致スルコトヲ要スル點ニ

法典調査會

於テハ改成法典人々分テ十條ヲ二項ト改テ
 異ナシ所ナレ知レトモ改成法典同様第一項
 項ハ夫婦カ各別ノ意見及ヒ利益ヲ有スル場
 合ヲ斟酌シテ養子ヲ為ス所ノ既偏希間ニハ
 必ス一致アルコトク必要トモス夫婦各別ニ
 養子ヲ為スコトヲ得ヘキモノトシ只一家ノ
 和熟ヲ妨ケザルカ為メ養子ヲ為サントスル
 一方ノ配偶者ハ他ノ一方ノ承諾ヲ要スト為
 スモ止ムル系ニシテ歐洲諸國ニ於テモ夫婦各
 別ニ養子ヲ為スコトヲ許ス立法例多ク數十
 ルカ如レ知レドモ元來養子ト養親ハ血縁ト
 同一ノ關係ヲ生スベキモノナシハ夫婦各別

ニ養子ヲ為スコトヲ認めんカ如キハ養子制
度ノ本旨ニ適セザルノミナラハ我國從來ノ
慣習トシテ夫婦ハ必ス一致ニテ養子ヲ為シ
敢テ各別ニ養子ヲ為スコトナカリシモノナ
シハ本字人若シ述ブル所ノ既成法典ノ立法
主義ヲ排斥シテ配偶者アハ者カ養子ヲ為サ
ズトスルニハ其配偶者ト一致スルコトヲ必
要トシ夫婦各別ニ養子ヲ為スコトヲ得サル
モノトセリ蓋シ配偶者アハ者カ養子ク為ス
コトアリテハ概子皆其配偶者ノ承諾ヲ得テ之
ヲ為スコトハ普通ノ状態ナリニ因リ本條ノ
如ク夫婦一致スルコト非サレハ養子ヲ為スコ

トシ得ムト為スモ之レカ為メニ濫リ、夫婦
各別ノ利益ヲ差シ一方ハ他方ヲ強制シテ一
家ノ和融ヲ傷リニ至ル弊業ヲ生スルコト勿
カルベシ故ニ亦條ヲ一項ハ配偶者アル為力
締紐ヲ為スルハ其配偶者ト一致スルコトヲ
必要トシ敢テ養子ヲ為ス場合ト養子ト為ル
場合ヲ區別セサルモノトス

然レトモ夫婦ノ一方カ他ノ一方ノ子ヲ引取
リテ養子ト為サントスルコトハ厚見ル所ニ
シテ即チ夫婦ノ一方カ再婚者ナル場合ニ於
テ前婚中ニ養ケタル子ヲ取りテ他ノ一方ノ
養子ト為サントスル場合ノ如キ即チ然リ此

堪合ニ於テハ養子ト爲ルハヤ希ハ既ニ夫婦
ノ一方ノ子トシテ以テ之ヲ收養スルニ當リ
殊更ニ配偶者ノ一致ヲ要スル理由ナク只養
子ト爲サレトスル一方ノ配偶者カ他ノ一方
ノ承諾ヲ得ルヲ以テ是レトスニ至シ本條牙
ニ項ノ規定ナシ所以ニ之ヲ第一項ノ通則ニ
對スル至當ノ例外トシ

法典調査會

第八百四十二條

(理由)

本條ハ配偶者ナシ着カ縁組ヲ爲スニ

ハ其配偶者ト一致スルコトヲ要スルニ立法ノ

本旨ヲ全カラシムル爲メニ特別ニ制定セラルシ

タル便宜法トス既成法典人事編第百十條牙

一項ハ独り養子ヲ為サントスル配偶者ノ一
方ガ意思ヲ表示スルコト能ハサル場合ノミ
ヲ豫想シテ此場合ニハ意思ヲ表示スルコト
能ハサル者ノ承諾ヲ要セストシ即チ他ノ一
方ガ單獨ニ自己ノ養子ヲ為スコトヲ得ヘキ
旨ヲ認ムルニ及シ養子ト為ラントスル配偶
者ノ一方ガ意思ヲ表示スルコト能ハサル場
合ノミヲ豫想シテ此場合ニハ意思ヲ表示ス
ルコト能ハサル者ノ承諾ヲ要ストシ即チ他
ノ一方ガ單獨ニ自己ノ養子ヲ為スコトヲ得
ヘキ旨ヲ認ムルニ及シ養子ト為ラントスル配
偶者ノ一方ガ意思ヲ表示スルコト能ハサ

ル場合ニ對シ別ニ何等ノ便宜法ヲ設ケサル
ニ因リ此場合ニ於テハ配偶者ハ他人ノ養子
ト爲ルコトヲ得ザルモノト云ハサルベカラ
ズ如シトモ本條ハ既ニ夫婦一致スルニ非サ
レハ縁組ヲ爲スコトヲ得ズルニ法主義ニ從
フモノナレバ養子ヲ爲セントスル配偶者ノ

法典調査會

一方が意思ヲ表示スルコト能ハサル場合ニ
對シ既成法典ノ如キ便宜法ニ從フコト能ハ
サルハ言フヲ要セザルノミナラズ養子ト爲
ラントスル配偶者ノ一方が意思ヲ表示スル
コト能ハサル場合ニ對シテ又相當ノ便宜法
ヲ設ケザルベカラザルコト勿論ナルニ因リ

本條ハ双方ノ場合ニ對シ同一ノ便宜法ヲ設
ケルモノトス蓋シ夫婦ノ一方ガ心神喪失等
ノ事由ニ因リ其意思ヲ表示スルコト能ハサ
ルニ拘ハラズ此夫婦ヲ養子ヲ爲シ又ハ養子
ト爲ルコトノ必要ニ接シ又ハ其利益ヲ感ス
ル場合決シテ少カラスト雖モ既ニ第八百四
十五條第一項ノ規定ニ依リ夫婦一致スルニ
非サレハ縁組ヲ爲スコトヲ得サルヲ以テ本
則ト爲スコト於テハ法律ニ特別ノ規定ナキ限
ハ前ニ述ブル如キ場合ニ於テ實際ノ必要便
宜ニ應ゼシメシメト能ハザンベシ故ニ本條
ハ左ノ亦別ニ對シテ一個ノ便宜法ヲ設ケ夫

婦ノ一方カ其意思ヲ表示スルコト能ハサル
トキハ他ノ一方ハ双方ノ先義ヲ以テ縁組ヲ
為スコトヲ得ベキ旨ヲ認メ之ニ依リテ縁組
ニハ必ズ夫婦ノ一致ヲ要スル立法ノ本旨ニ
悖ラズ且夫婦カ養子ヲ為シ又ハ養子ト為ラ
ントスル双方ノ場合ニ適シテ實際ノ必要便
宜ニ適セシメヨリ

第八百四十七條

(理由) 縁組ヲ為スニ當リ養親カ他方其子ノ
配偶者ト為スベキ豫約ヲ以テ未タ婚姻年齡
ニ達セザル者ヲ養子ト為シ或ハ養親ノ子カ
未タ婚姻年齡ニ達セザルニ均ハラス他日其
配偶者ト為スベキ豫約ヲ以テ縁組ヲ為スコ

トハ從來普通ニ行ハシタル所ニシテ其目的
ハ一概ニ之ヲ批難スヘキニ非スト至モ其統
果ハ往々當事者ノ意思ニ及シテ強制的ニ婚
姻ヲ為サシムル弊ヲ免レサルベシ之ニ婚
ニ関スル立法ノ亦皆ト相容レサル所ニシテ
婚姻ハ務メテ當事者ノ自由意思ニ基ツリコ
トヲ要スルモノナレバ婚姻年致ノ如キモ亦
自ラ各人ノ意思能力ノ發育ヲ斟酌シテ相當
ノ年致ヲ定リんモノナルノミナラズ殊ニ亦
寧ノ如ク離婚ノ原因ヲ制限シテ容易ニ之ヲ
許ササル立法主義ニ從フ以上ハ最初婚姻ヲ
為スニ當リテハ務メテ當事者ノ自由意思ニ

基カレムコトヲ要ス然レバ他月養親ノ子
ト婚姻ヲ為サレム豫約ヲ以テ未ク婚姻年
満ニ達セザル者ヲ養子ト為シ或ハ未ク此年
齡ニ達セザル子ノ配偶者ト為スベク豫約ヲ
以テ養子ヲ為スコトヲ許スニ於テハ此等ノ
豫約ノ為メニ強制セウシ當事者ハ其意思ニ
依テテ婚姻ヲ為スコ至ハハ致ノ免レサル所
ニシテ前ニ述ブル所ノ立法ノ本旨ニ悖ル
ニテラス之ヲ為メニ夫婦ノ親類ヲ妨ケ種
々ノ弊害ヲ醸スニ至ルべシ而シテ此等ノ弊
害ヲ豫防シ婚姻ニ関スル立法ノ本旨ニ悖ル
サクレトスルニハ未ク婚姻年満ニ達セザル

者ヲ養子ト為ルニ當リテハ他日之ヲ以テ養
 親ノ子ノ配偶者ト為スヘキ縁約ヲ以テスル
 コトヲ禁シ又未タ婚姻年迄ニ達セサル子ノ
 配偶者ト為スベキ縁約ヲ以テ養子ト為スニ
 トシ得サラズルコトヲ要ス是レ即チ本條
 ノ規定ヲ證ケタル所以ナリ

法典調査會

第四百四十八條

(理由) 本條ハ父母ヲ累加スルコトヲ制限ス

ルモノニミテ既ニ第七百三十八條ハ婚姻ニ
 依リテ他家ニ入りタル者力更ニ他家ニ婚姻
 セントスル場合ニ於テ本條ト同一ノ立法主
 義ヲ採用セリ蓋シ法律上濫リニ父母ヲ累加

スルコトヲ許ストキハ徳ニ人非關係ヲ錯雜
ナラシムルノミナラズ最初実父母ヲ養ふ又
ハ婚家ヲ信シテ其子ヲ養子ト違ハシ或ハ婚
嫁セシメタ人意思ニ及スル結果ヲ生シ殊ニ
濫リニ他人ノ子ヲ收養シテ更ニ之ヲ他人ノ
養子ニ遣ハシ之ニ因リテ不正ノ利益ヲ貪ム
之ルル如キ弊害ヲ免シサルベシ而シテ從來
ノ慣例ニ依ルモ縁組又ハ婚姻ニ因リテ他家
ニ入りタル者方更ニ養子トシテ他家ニ入ラ
ントスルニハ先ツ実家ニ復籍セシムルモノ
ナレバ本案ハ既成法典ニ其例ナキニ拘ハラ
ズ時ニ本條ノ規定ヲ設ケテ此趣旨ヲ明示シ

濫リニ父母ヲ累加スルコト勿カラシムルモ
 ノトスル配偶者アル者が養家又ハ婚嫁ヨリ
 更ニ養子トシテ他家ニ入ラントスルニ當リ
 必ス其家ニ復籍スルコトヲ要スト為ストキ
 ハ夫婦其籍ヲ異ニスル結累ヲ生セシムベキ
 ニ因リ本條ハ特ニ但素ノ規定ヲ設ケ配偶者
 アル者カ養子トシテ更ニ他家ニ入ラントス
 ル場合ヲ除外セリ

法典調査會

第八百四十九條

(理由) 本條ハ改定法典人事編第百十三條第

一項及ヒ第百十五條ノ規定ト同一ノ趣旨ニ
 基クテト雖モ縁組ヲ為スコトハ既ニ一家ノ

法律行為タル以上ハ其成立ニ付キ當事者ノ
承諾ヲ要スルコト更ニ疑ヲ容レザル所タル
ニ因リ殊更ニ其趣旨ヲ明言セル既成法典人
事編第百十三條第一項ノ規定ハ之ヲ削除シ
又同第百十五條第一項ノ如ク父母カ互々ニ
其子ノ縁組ヲ承諾スルコトヲ得トシ人身ニ
関スルコトヲ以テ父母ノ法律行為ノ目的ト
為スル如キ意義ヲ示スハ頗ル穩當ヲ缺クノ
ミナラズ既成法典ノ如ク我子ノ縁組ヲ承諾
スルコトヲ得ル父母ハ其子ノ家ニ在ルト否
トヲ問ハサルハ廢キニ失ヒテ其當ヲ得サル
ニ因リ本條第一項ハ即チ養子ト爲ルニキ者

カ十九年未滿ナルトキハ其家ニ在ル父母ハ
本人ニ代リテ縁組ノ承諾ヲ為スコトヲ得
トシ右ニ述ベタル既成法典ノ缺點ヲ補正セ
リ其他既成法典ハ縁組ノ承諾ヲ與フベキ父
母ノ一方又ハ双方ガ死亡シ又ハ其意思ヲ表
示スルコト能ハサル場合ヲ豫想シテ規定ヲ
設クトモ父母ノ一方又ハ双方ガ親シサル
場合ヲ豫想セザリシニ因リ本條ヲ二項及ヒ
テ三項ハ共ニ此場合ヲ加ヘテ然レトモ本
條ヲ三項ノ場合ニ於テ既成法典ハ祖父母ヲ
ニテ承諾シ得ルニシテ又ハ本業ハ後見人
ヲシテ親族会ノ認許ヲ得テ承諾ヲ得ルニシム

ルコトニ改メタル所以ハ實際に祖父父母ノ存
セサル場合少カラサルト後見人ヲシテ親族
ノ認許ヲ得テ承讓ヲ與ヘシムルコトノ安全
ナルニ若カサルヲ認メタルニ因ルモノコレ
ニ既ニ婚姻ノ承讓ヲ與フルコトニ関シテ之
ト同一ノ立法主義ヲ採用セリ

第八百五十條

(理由) 既成法典人事編第九十五條ハ滿十ニ
年以上ノ子が養子トナルニハ父母ノ承讓ヲ
要スヘキ至當ノ規定ヲ設ケルニ均ハラズ成
年ノ子ノ養子ヲ為スニ當リテハ別に父母ノ
承讓ヲ要セズト為スガ如ク且レドモ養子ハ

縁組ニ因リテ養家ニ入り養親ノ嫡出子ヨル
身方ヲ取得スヘキモノニシテ養親ノ父母ニ
種々ノ利害關係ヲ及ボスモノナレバ成年ノ
子ヲ養^子ツ為ストオト虽モ其父母ノ系統ヲ變
ケレハルツ以テ至当トス故ニ本業ハ此点ニ
於テ既成法典ヲ補正シテリト虽モ既成法典
ノ如ク單ニ父母ノ系統ヲ必要トシ其家ニ在
ルト在トケ同ハサントハ廢キニ失シテ其必要
ナキニ因リ本業ハ何レノ場合ニ於テモ其家
ニ在シ父母ノ系統ヲ要スルニ止メテリ其他
亦條未段ニ於テ牙七百七十三條牙三項牙三
項及シ牙七和七十四條ノ規定ヲ準用シ之ニ

依リテ既成法曲人事編中有十五條身二項及
トイフ三項ノ規定ヲ修正スルシ理由ハ右ノ各
條項ニ関シテ該明セシ所ト同一ナルヲ以テ
之ヲ略ス

第百八十五十一條

(理由) 既成法曲人事編中有十三條ハ縁組ノ

承諾ハ証人二人ノ立合リ得テ慣習上ノ儀式
ヲ行フニ因リテ成立スルモノトシ此儀式ヲ
行フニ付テハ婚姻ノ儀式ニ關スル規定ヲ適
用スト呈モ縁組ノ承諾ハ右ノ儀式ヲ行フニ
因リテ成立スルニ非スニテ此儀式ハ法律上
縁組ノ效力發生ノ時期ヲ定ムルモノナルベ

ク又之會証人ハ必ス二人ニ限ルベキ理由ナ
キノミナラズ縁組ニ関シテ別ニ慣習上ノ儀
式ガ明定セルモノト云フコトヲ得ヌ却テ從
事縁組ニ付キ出願又ハ届出ヨ基サレハハコ
トハ普通ニ行ハレタ人所タルニ因リ本業ハ
既ニ婚姻又ハ離婚ノ効力發生ノ時期ヲ定ム
ルニ付キ採用シタル主義ニ從ヒ縁組ハ戶籍
吏ニ之ヲ届出ツルニ因リテ其効力ヲ生ズル
ニ從テ届出ノ場所方式ノ如キモ婚姻ノ届出
ニ關スル規定ニ從フコトヲ得（キ）因リ本
業ハ縁組ノ効力發生ノ時期ニ関シテ寧ニ婚
姻ノ届出ニ關スル才七百七十五條ノ規定ヲ

第八百五十二條

(理申) 適言ヲ以テ養子ヲ為スコトハ從來ノ慣例上多クハ禁止又ハ制限セラレタルカ如ク諸國ノ立法例ニ依ルモ縁組ハ契約ニ因リテ之ヲ為スベキモノトシ適言ヲ以テ養子ヲ為スコトハ多クハ之ヲ許ササルカ如ク紐シ

法典調査會

トモ實際上之ヲ禁止スベキ理由ナク却テ一家継續ノ必要上適言ヲ以テ養子ヲ為スコトヲ許サ、ん可カラサルニ因リ本條ハ既成法典人々編ヲ而三條才二項及ト有百二十三條才一項ノ規定ニ從ヒ適言養子ヲ認許ストモモ此適言ヲ為スコト必要ナク擬力及ト方式ノ

如キハ之ヲ遺言ニ関スル通則ニ譲リテ其
他既成法典人事編分百二十ニ條分ニ項ハ右
ノ遺言ハ其効力ヲ失フベキ場合ニ関シ特ニ
規定ヲ設クト虽モ其適用ノ範圍力聊カ變キ
ニ生スルコトハ改ニ第八百四十三條ニ於テ
說明セシ如クニシテ且分八百四十三條ノ明
文ヲハ以上ハ之ニ抵觸スル遺言力其効力ヲ
生セキトモト更ニ疑ナキヲ以テ本案ハ右ニ
述テル所ノ既成法典ノ規定ヲ削除セリ
既成法典人事編分而ニ十三條ハ遺言ニ依ル
縁組ノ遺言ニ関スル規定ヲ掲クト虽モ此縁
組ノシテ効力ヲ生セシムルニ付テ養子ト為

ルハキ名又ハ其法定代理人カ遺言有ノ死後
其承^選為スコトヲ要スルハ別ニ明文ヲ要セ
ザルニ因リ本條ハ右ノ條文ヲ删除シタリト
虽モ遺言養子ノ場合ニ於テ縁組ノ届出ヲ為
スニハ當事者ノ一方カ存セザルニ因リ本條
ハ時ニ本條ヲ二項ノ規定ヲ設ケ縁組ノ届出
ニ関スル前條ノ通知ニ對シ一個ノ例外ヲ定
メタリ其他既成法典人事編ヲ右ニ十四條ハ
縁組届出ノ手續ニ関スルモノナシハ本條ハ
之ヲ删除セリ

第八百五十二條

(理由) 本條ハ婚姻ノ届出ニ関スルヲ七百七

十三條ノ規定ト同一ノ趣旨ニ基ツクモノナ
レハ別ニ之ヲ説明スルノ要ナシ而シテ改定
法典人事編第百十四條ハ縁組申出ノ時ニ差
出スベキ書類ヲ明示スト雖モ之ノ寧ニ手續
法ニ該ルベキモノナシハ本案ハ之ヲ删除セ
リ

法典調査會

第百五十四條

(理由) 本條ハ改定法典第百二十五條ト同一
ノ趣旨ニ基ツキ縁組ニ関スル法定ノ要件ハ
本國法又ハ住所ノ法ニ依リテ之ヲ定ムベキ
國際私法ノ通則ニ從ヒ日本人が外國ニ於テ
縁組ヲ爲スニ有テハ第百四十條乃至第百八

五十條ノ規定ニ從フベキ旨ヲ明示セリ

且既成法曲人事編第百十二條ハ外國人カ縁
組ノ方法ニ依リ歸化法ノ適用ヲ受ケスレテ
日本人ノ養子ト為ルコトヲ得ヘキ結果ヲ生
セレコトヲ慮リ殊更ニ外國人ハ日本人ノ養
子ト為ルコトヲ得甘ん肯ヲ掲グト虽モ既ニ

法典調査會

外國人ト婚姻ヲ為スコトヲ懇々以上ハ敢
テ外國人ヲ養子ト為スコトヲ禁スル理由ナ
ク又歸化法ノ適用ヲ全カラシムルニハ容易
ニ適當ノ修正ヲ加フルコトヲ得（キモノナ
レハ本條ハ右ニ掲グル所ノ既成法曲ノ條又
テ刪除セリ）

第八百五十五條

(理由) 本條ハ既成法典人事編第九二十條ノ一部ト同一ノ趣旨ニ基ツクモノニシテ外國ニ在ル日本人間ノ婚姻ノ届出ニ関スルヲ七百七十八條ノ規定ト其理由ヲ異ニセザルニ因リ再之ヲ説明セス

法典調査會

第三款 縁組ノ無效及ニ取消

(理由) 本款ハ縁組ノ其法定ノ要件ヲ欠缺セルニ因リ或ハ無效ト爲リ或ハ取消スニトフ得ヘキ場合ヲ規定スルモノニシテ既成法典人事編第七章第四節ニ相當ス而シテ既成法典ハ本節ヲ題シテ養子縁組ノ不成ニ及ビ無

故ト云リト云ニ此ニ所謂無效トハ竝ニ取消

ニ得(トモノ事)コトヲ意味スルハ既成法

典ノ立法ノ本旨ニ照シテ疑ナキ所ナシハ

本條ハ既ニ婚姻ニ関シテ採用セシ例ニ從ヒ

本款ヲ顯ニテ縁組ノ無效及ヒ取消ト改メテ)

茅八百五十六條 縁組ハ左ノ場合ニ限り無效

トス

法典調査會

一 人達其他ノ事由ニ因リ当業者ニ縁組ヲ
為ス意恩ナキトキ

二 當事者力縁組ノ届出ヲ為サレルトキ但
其届出ヲ分八百五十一條及ヒ分八百五十
二條ノ條件ヲ缺クニ止マルトキハ之シカ
為メニ其効力ヲ妨ケラハ、コトナシ

(理由) 本條ハ縁組ノ無効ナル場合ヲ列挙ス

ルモノニシテ其外一考ハ既成法典人事編ヲ

有二十七條ノ字句ヲ刪止シテハ、迄キス然

レトモ本業ハ改ニ戸籍変更ニ届出ツルコトヲ
以テ縁組成立ノ一要件ト爲シタルニ因リ特
ニ本條ヲニ辨ノ規定ヲ設ケ當事者ヲ縁組ノ
届出ヲ爲サレトキハ其縁組ハ当然無効ト
ハベキコトヲ明カニスルモノニシテ改定法
典人事編分百ニ十九條ノ如ク殊更ニ右ノ場
ニ於ケル縁組ノ無効ヲ請求セシムル主義ヲ
排斥セリ然レド學ニ届出ニ関スル手續上ノ
條件ヲ缺キタルカ否メ縁組ヲシテ当然無効
トラシムルハ實際ノ事情ニ適セザルニ因リ
時ニテニ辨但書ノ規定ヲ設ケタルモノニシ
テ婚姻ノ無効ニ関スル分七百八十條ヲニ号

但書ノ規定ト同一ノ趣旨ニ基キモリトス

第八百五十七條

(理由) 本條ハ縁組取消ノ原因カ法律ニ依リ

テ特定ヤルルコトヲ永久モノトシテ婚姻

ノ取消ニ關スル分七百八十一條ノ例ニ從ハ

リ而シテ改定法典人事編分百二十八條ハ概

法典調査會

括的ノ規定ニ依リ縁組無效ノ原因及ヒ無效

ノ請求權有テ指定ニ受テ百三十條以下ニ於

テ各ノ場合ニ存キ無効ノ請求權有テ限定ス

ルハ却テ規定ノ明ラテ換スル攝メルニ因リ

本業ハ少ク以下ニ於テ縁組ノ取消ニ存キ各

種ノ原因及ヒ各ノ場合ニ於テハ取消請求權

者ニ関シ各別ノ規定ヲ致ケヌテ該筆ノ明ヲ
ナラセゴトヲ期セリ

第九百五十八條

(理由) 本條ハ未タ成年ニ達セザル者ヲ養子
ト爲シタル場合ニ於ケル縁組ノ取消ニ関ス
ル規定ニシテ改訂法典人事編第九十八條

法典調査會

條ヲ二項ハ右ノ場合ニ於テ極メテ廢テ無效
ノ請求權者ヲ認ムルハ其必要ナキニナリ
ス却テ妥當ヲ缺ク處下ニニ因リ本條ハ之ヲ
養親及ヒ其法定代理人ニ限定セリ而シテ養
親力既ニ成年ニ達シタル後其取消ニ得ハキ
縁組ヲ追認シタルトキハ勿論之ヶ月間ヲ取

消権ヲ行侮セサルニ於テハ不確定ナル縁組
關係ヲ早リ確定セシムルノ至當ナルヲ認ム
ルニ因リ本條ハ此點旨ニ基ツテ特ニ本條但
書ノ規定ヲ設ケタリ

第八百五十九條

(理由) 本條ハ年長者又ハ尊屬者ヲ養子ト為

法典調査會

シ或ハ推定家督相続人アリテ之ヲ男子ト爲
ト爲シ若シハ婚姻ノ豫約ヲ以テ未タ婚姻年
齡ニ達セサル者ヲ養子ト爲シ又ハ斯ノ如キ
者ニ對シテ養子ト爲シタル場合ニ於ケル縁
組ノ取消ニ關スル規定ニシテ本條ニ列挙セ
ル規定ニ達スル縁組ハ公益上ニ關係シ

有スル者ナレハ檢事ニモ其取消ヲ請求スル
コトヲ得セシメ且本條ノ取消權ハ時日ノ経
過又ハ追認ニ因リテ消滅セザルモノトナセ

第八百六十條

(理由) 本條ハ後見人カ管理ノ計畫ヲ終ハシ

法典調査會

サル間ニ被後見人ヲ養子ト爲シタル場合ニ
於テハ縁組ノ取消ニ關スル規定ニシテ既成
法典人事編第百三十條第一項ハ此場合ニ於
テ專ニ被後見人ニ取消權ヲ認ムルニ過キ不
ト云フ其法定代理人ニモ此權利ヲ認ムルコ
トノ至当ナルハ別ニ説明ヲ要セザル所ナシ

ハ取消請求權者ノ範圍ヲ適當ニ擴張セリ即
シテ既成法典同條ヲ二項ハ被後見人ノ成年
ニ達シタル後三ヶ月ヲ経過シ又ハ縁組^組認諾
シタルトキハ無效ノ訴權ヲ失フモノト爲ス
ト雖モ滿十五年以上ノ者ハ縁組ノ承諾ヲ爲
スコトヲ碍^碍キハ既ニ牙八四四十九條ノ耶
示スル所トシテ既成法典モ亦此趣旨ニ從フ
モノナレハ亦業々廢ル管理ノ計畫カ終リタ
ル後六ヶ月ヲ経過シ又ハ追認ヲ爲シタルト
キハ取消請求權ハ消滅スルモノト改メタリ
然レトモ管理ノ計畫ハ養子カ滿十五年ニ達
セサル間ニ終ハルコトヲ了んク以テ亦條人特

將ニ本條第一項ノ規定ヲ數ケ此場合ニ於テ
ハ右ニ揚グル所ノ六月ノ期間ハ養子ヲ滿
十五年ニ達シタル時又ハ後任ノ後見人カ就
職シタル時ヨリ起算スルモノト為セリ

第八百六十一條

(理由) 本條ハ配偶者アル者カ其配偶者ト一

致セスニテ縁組ヲ為セタル場合ニ於テハ取
消權ニ関スル規定ニシテ此場合ニ於テ取消
權ヲ有スベキ者ハ縁組ノ系縁ヲ為サ、リニ
配偶者タルハキハ別ニ說明ヲ要セザル所々
ルニ關シ本條ハ此点ニ於テ既成法典人事編
第四百二十八條第一項ノ範圍ヲ限縮シ且本條

ノ場合ニ於テモ晴日ノ經過又ハ追認ニ因リ
テ取消權ヲ消滅セシムルコトヲ要スルハ勿
論ナリトモ元來配偶者ノ一致ヲ必要トス
ル場合ニ係ルヲ以テ單ニ晴日ノ經過ノミ
因リテ當然取消權ヲ消滅セシムルコトヲ得
ス第ニ配偶者ノ一方ノ追認アリタシコトヲ
推定セサルベカラザレバ因リ本筆ハ特ニ本
條ノ祖意ニ於テ最初縁組ノ系譜ヲ為ササリ
ニ配偶者ヲ縁組アリタシコトヲ知りタシ後
三ヶ月ヲ經過シタルトキハ縁組ヲ追認シ
ハモノト看做スト為セリ

第八の二十三條

理由 本條ハ夫婦養子ノ場合ニ於テ配偶者
ノ一方カ其意思ヲ表示スルコト能ハザリシ
ニ因リ他ノ一方ハ双方ノ先義ヲ以テ爲シタ
ハ縁組ノ取消ニ関スル規定ニシテ此場合ニ
於テ取消権ヲ有スヘキ者ハ意思ヲ表示スル
コト能ハザリシ配偶者ニ限ラハシ以テ至
者ノ制限ト認ムルニ因リ本條ハ此点ニ於テ
前條ト同ジク既成法典人事編第百二十八條
カニ項ノ範圍ヲ限縮セリ其他老ノ取消権ノ
消滅ニ関スル本條但書ノ規定ハ別ニ説明ヲ
要セザルニ至者ノ制限多クシ

第八百六十三條

理由 本條ハ既成法典ニ其例ナレトモニ既
ニ本條ニ於テ縁組又ハ婚姻ニ因リテ他家ニ
入りタシ者力更ニ養子トシテ他家ニ入ラシ
トスルハハ実家ニ復籍スベキニトシ要シタ
ル以上ハ此規定ニ違反シテ為シタル縁組ノ
存立スルカ為メ不利益ヲ被ルル虞アリ若シ
シテ其取消ヲ請求スルコトヲ得セシムルヲ
以テ至當トス而シテ此場合ニ於テ縁組ノ取
消ヲ至難スルニ付キ最ニ其理由ヲ有スル
者ハ養子ノ実家ノ戸主及ヒ其直系尊屬タル
ベキヲ以テ本條ハ此等ノ者ニ右ノ取消權ヲ
認ムトモモ元來此ノ如キ取消權ヲ永ク存続

七レケルコトハ法律關係ヲ不確定ノ狀態ニ
止メシケル弊アルニ因リ必要ノ限度ニ應シ
テ其存続ヲ制限スルヲ以テ至若トス之レ亦
掌人時ニ本條但書ノ規定ヲ設ケ直系尊屬名
ノ取消權ハ此名ヲ縁組アリタルコトヲ知リ
タル後六ヶ月ヲ經過シ又ハ承認ヲ為スコト

法典調査會

ニ因リテ消滅スルモノト爲シタル所以ナリ
第八百三十四條

(理由) 本條ハ縁組ヲ爲スニ付テ必要ナル父
母其他ノ者ノ承諾ナクモテ成年ノ子ヲ養子
ト爲シ又ハ滿十五年以上ノ子ヲ養子ト爲リ
タル場合ニ於ケル縁組ノ取消ニ関スル規定

ニシテ既成法典人事編身有ニ十二條ニ解カ
修正ヲ加ヘテリ即チ既成法典ハ本條ノ場合
ニ於テ承諾ヲ受リテキ者ニモ無效ノ請求權
ヲ與フト云ヒ之レ其當ラ得サル所タルニ因
リ本業ノ單ニ承諾權ヲ有セシ者ニ取防權ヲ
與フルニ止メたり即チ假令承諾權ヲ有ス
ル者ノ承諾ヲ受ケルニモ詐欺又ハ強迫ニ因リ
テ之ヲ得タルトキハ依テ承諾ナクシテ縁組
ヲ爲スルニ場合ノ如ク之ヲ取消スコトヲ得
セシメザルニカクザルニ拘ルラズ既成法典
カ此趣旨ヲ明示セサルハ疑義ノ娣タルベキ
ニ因リ本業ノ承諾力詐欺又ハ強迫ニ因リテ

ハ時ニ亦系認權ヲ有セシ者ニ縁組ノ取消權
ヲ此ノ旨ヲ明セリ

其他本條ノ取消權ノ消滅ニ付テハ婚姻ノ取
消權ニ関スル者七の八十二條ノ規定ニ從フ
心キハ至當ト認ケルコト因リ本條亦二項ハ右
ノ規定ヲ本條ノ取消權ニ準用スルキ旨ヲ掲

法典調査會

シルモノニテテ聊カ改訂法典人事編第百三
十二條亦二項ニ依止シテ加フルコトニ歸スト
虽モ其理由ハ改訂者七の八十二條ニ於テ之
ヲ説明セシコト因リ此ニ之ヲ略ス

第八の二十五條

(理由) 本條ハ改訂法典人事編第百三十三條

ノ一部ニ修正ヲ加ヘタルモノニシテ即チ婚
姻ノ無效又ハ取消カ縁組ノ取消等因ラント
トヲ得ル場合ニ関スルモノトシテ蓋シ婚養子縁
組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ縁組ノ條件タルカ
如キモノナレバ若シ其婚姻カ無效又ハ取消
ニ歸スルトキハ婚養子トシ本音ニ悖ルコ
至ルモノナレバ縁組ヲモ取消スコトヲ得
ルニキムベキハ至當ノ事ニ屬スト至モ婚姻ノ
無效又ハ取消ノ處ニ縁組ヲ取消サレムベキ
ニ非ス却テ實際ニ婚約ノ如何ニ拘ハラズ縁
組ヲ存続スル場合少カラザルニ因リ本筆モ
改定法典ノ如ク婚養子縁組ノ場合ニ於テハ

ヶ此疑ナカウニメタリ

以テ本掌ハ時ニ本條第一項但書ノ規定ヲ設
カガルベカウサハカウ疑ハシムルニ足ルヲ
求ト縁組取消ノ請求トハ必ス別々ニ之ヲ為

其他既成法典ハ本條ノ場合ニ於ケル縁組ノ

取消權ハ婚姻ノ無效又ハ取消ノ言渡後三ヶ

月ヲ過キタルトキハ消滅スヘキモノト為ス

ト虽ニ當事者ハ婚姻ノ無效又ハ取消ヲ知ラ

ザルコトアルベキニ因リ本條ハ本條第一項

於テ右ノ取消權ハ當事者カ婚姻ノ無效ナル
コト又ハ取消アリタルコトヲ知りタル後六
ヶ月ヲ經過スルコトニ因リテ消滅スルモノ
トシ且此取消權ハ當事者一致ニテ之ヲ拋棄
シ即チ婚姻ノ無效又ハ取消ニ拘ハラズ縁組
ヲ存続セシムルコトヲ得んモノナレトモ當事
者ノ拋棄ニ因リテ其取消權ノ消滅スベキ旨
ヲ明カニセリ

第八百三十二條 第七百八十七條及之ヲ七印
八十八條ノ規定ハ縁組ニ之ヲ準用ス但チ七
百八十七條ノ二項ノ期間ハ之ヲ六ヶ月トス
(理由) 亦條ハ詐欺又ハ強迫ニ因リテ爲コト

ル縁組ノ取消及同一般ニ縁組取消ノ效果ニ
関スル規定ニシテ既成法典人事編百三十
一條ハ常ニ強暴ニ因リテ爲シタル縁組ノ無
效請求権ニ関シテ規定ヲ設ケルニ止マリ詐
欺ニ因リテ爲シタル縁組ヲ包含セシメザル
ハ其缺點タルニ因リ本案ハ詐欺又ハ強迫ニ

法典調査會

因リテ爲シタル婚姻ノ取消ニ関スル第七百
八十七條ノ規定ヲ縁組ニ準用スベキモノト
シ殊ニ既成法典ハ縁組取消ノ効力ハ既往ニ
遡ルモノナリヤ否ヤニ付特別ニ規定ヲ設ケ
ザルカ爲メ疑義ヲ生ゼシムル虞アリニ因リ
本案ハ婚姻取消ノ効果ニ関スル第七百八十

八條ノ規定ニ依リ縁組ニ準用スベキ旨ヲ明示セリ

第三款 縁組ノ效力

(理由) 本款ハ既成法典人事編第七章第五節ニ相当シ縁組ノ效力ヲ規定セリ且既成法典ハ養子ノ特有財産ニ関スル規定ヲ以テ縁組

法典調査會

ノ効力ニ関スル規定ノ一ト爲スハ其當ヲ得
甘ハニ因リ本筆ハ之ヲ删除セリ

第八百二十七條

(理由) 養子ハ縁組ニ因リテ養親ノ嫡出子ト
ハ身分ヲ取得シ養親ノ親族ト認テ親族間係
ラ生スルコトト我同古來ノ慣例ニシテ且此

効力カ縁組ノ月ヨリ發生スルコトモ亦一般ニ認メラレタル所ナシハ本業ハ既成法典人等編第百三十四條ト同一ノ趣旨ニ從ヒ本條ノ規定ヲ設ケヨリ故ニ養子カ養親ノ実子ヨリ弟長ナシ場合ト虽モ嫡出子ノ身カハ縁組ノ月ヨリ嫡メラレ之ヲ取行スルモノナシハ嫡出子ノ順序ニ依テ實子ノ次ニ位スベキモノトス

第八百二十八條

〔理由〕 縁組ニ因リテ養子ト養親ノ間ニ親子

ノ關係ヲ生スルモ養子ハ之ニ因リテ當然養親ノ家ニ入ルモノト云フコトヲ得ヌ却テ養

子ハ尚ホ実家ニ其籍ヲ存スト爲メ立法例少
カヲサレニ因リ本家ハ特ニ本條ノ明文ヲ揭
シ縁組ニ因リテ養子ハ當然養親ノ家ニ入ル
コトヲ明カニシ之ニ依リテ我國古來ノ慣例
及ヒ縁組ニ関スル立法ノ本旨ニ適セシムル
モノニシテ既成法典人事編ヲ百三十四條モ
亦之ト同一ノ趣旨ニ依ルモノトス

第四款 離縁

(理由) 本款ハ養子ノ離縁ニ関スル規定ヲ纏
括スルモノニシテ既成法典人事編ヲ八章ニ
相當ス蓋シ既成法典ハ離縁ニ関シ特ニ一章
ヲ設ケ人ノ頗ル編纂ノ体裁ヲ失フモノト云

ハサハベカラサルニ因リ本條ハ養子ニ関ス
ル本條中ノ一款トシテ離縁ノ規定ヲ掲グル
ニ止ムルノミナラズ既成法典ノ如ク離縁ニ
関スル規定ヲ教條ニ分類スル必要ナキヲ以
テ本條ハ總テ此等ノ規定ヲ本款ノ下ニ整置
配列セリ

第八百六十九條

(理由) 本條ハ協議上ノ離縁ニ関スル本則ニ
シテ其第一項及ヒ第二項ハ既成法典人事編
第百三十七條ノ字句ヲ修正シテ之ニ追キズ
蓋シ縁組ハ之ニ因リテ養子ト養親ノ間ニ親
子ノ關係ヲ生セシムト虽モ之ニ單ニ人意ニ

基ツリモノナシハ当事者力協議上ニテ離縁
 フ為サント欲スルトキハ敢テ之ヲ認リベカ
 うサハ理由ナキノミナラズ従来協議上ノ離
 縁ハ普通ニ行ハシタハ所ナレバ本筆モ亦固
 ヲリ之ヲ認ムト虽モ既ニ之ヲ許シタ人ハ上
 ハ筋メテ其契旨ヲ貫カシムルコトヲ要ス然
 ハニ既成法典ハ養親力死亡シタハ後養子乃
 離縁ヲ為サント欲スル場合ニ對シ別ニ規定
 フ設ケサ人モノナシハ此場合ニ於テハ協議
 上ノ離縁ヲ為スコトヲ得スト云ハサルベカ
 うサ人ニ因リ本筆ハ特ニ本條牙三項ノ規定
 フ設ケ其缺點ヲ補フモノニシテ即チ右ノ場

合ニ於テハ養子ハ戸主ノ承諾ヲ得テ離縁ヲ
為スコトヲ得ベリ若シ其養子カ既ニ戸主ナ
ルトキハ親族合ノ承諾ヲ得テ離縁ヲ為スコ
トヲ得ヘキモノト為セリ

第百七十七條

(理由) 本條ハ既成法典人事編第百三十八條

法典調査會

ト同一ノ趣旨ニ基ツクモノナリト雖モ離縁
ヲ為サントスル養子ノ年終ヲ限リテ滿二十
五年以下ノ者ト為シタル所以ハ既ニ此年終
ニ達シタル者ハ充分ニ離縁ノ利害得失ヲ熟
考スヘキ能カラ有スルニ因リ當事者間ニ離
縁ノ協議力纏マリタルニ拘ハラヌ強ヒテ縁

組に於て義理擁つ有せし者ノ承諾ヲ求ノニ
ルル必要ナクレバナリ蓋シ協議上ノ離婚ニ
同意人オハ而テ規定ハ既ニ在ニテ是ナル
所ノ趣旨ニ基キ離婚ヲ為サントスル者ノ
年限ヲ限定セリ

第八百七十一條

法典調査會

(理由) 本條第一項ハ協議上ノ離婚カ其効力
ヲ生スル時期ヲ指定スルモノニシテ既成法
典人事編オ百四十六條ト同一ノ趣旨ニ基キ
ケリ而シテ本案ハ既ニ婚姻離婚及ビ縁組ノ
効力ハ總テ戸籍吏ニ届出ツルニ因リテ發生
スルモノト爲シタルニ因リ離婚ノ効力發生

ノ時如ク付キ又此主義ニ從フベキハ當然ニ
シテ其届出ノ場所方式ノ如キニ散ラ婚姻ノ
届出ト雖ナラサルニ因リ亦條カ一項ノ即チ
學ニカ七百七十五條ノ規定ヲ協議上ノ離縁
ニ準用スベキモノト爲セ)

本條カ二項ハ協議上ノ離婚ノ届出ニ関スル

法典調査會

カ八百十二條ノ規定ト全ク同一ニシテ別ニ
該明ヲ要セズ其他既成法典人事編カ百三十
九條ハ離婚ノ届出ヲ爲スニ當リ差出スベキ
書類ヲ明テスト雖モ此等ハ手續法ニ定ムル
キモノナシハ之ヲ刪除セリ

第八百七十二條

(理由) 本條ハ雜録ノ特定原因ニ掲タルモノ
ニシテ既成法典人事編ヲ百四十條ニ修正シ
加ヘヨリ蓋シ既成法典ハ雜録ノ原因ノミヲ
引致シ其原因ガ当事者ノ熟シニ存スルカラ
明カニセザシハ疑ナハラズ本條ハ此点ヲ明
白ニシ且各種ノ原因ニ付左ノ補正ヲ為セリ

一 本條第一号ハ當事者間ニ虐待又ハ侮辱
ノ所為アリタル場合ニ限スルモノニシテ
既成法典人事編ヲ百四十條第一号モ亦固
ヨリ此原因ヲ包含ス(一ト云モ其趣旨ヲ
明確ナラシムル為メ特ニ之ヲ明示セリ)

二 本條第一號ハ當事者ノ一方カ他ノ一方ノ

直系尊屬ニ對シテ虐待又ハ侮辱ノ所為ヲ
為シリル場合ニ関スルモノニシテ改定法
典ノ如ク學ニ尊屬親ニ對シテ云云ト云フ
ニ止マルトキハ傍系尊屬ウモ包含スルキ
ハ当然ニシテ離縁ノ原因ヲ定ムルニ付キ
聊カ廢キニ失フト云ハ甘んバカウ甘んニ
因リ本案ハ直系尊屬ニ對シテ虐待又ハ侮
辱ノ所為ヲ為シタル場合ニ限定セリ之ニ
及ビテ改定法典ハ養親カ養子ノ直系尊屬
ニ對シテ虐待又ハ侮辱ノ所為ヲ為シタル
場合ヲ包含セシメ甘んハ權衡ヲ失シ人情
ニ悖ルモノナレハ本案ハ廢ル此場合ニモ

雜縁ノ原因ノ生ズベキコトヲ認メタリ

三 爪條力三号ハ養親ノ直系尊属ヲ養子ニ

對シテ虐待又ハ侮辱ノ所為ヲ為シタル場

合ニ阙スルモノニシテ既成法典ノ如ク單

ニ養家ノ尊属親ヨリ云云ト云フニ止マシ

トキハ度キニ失スル弊ナキ限ハサハニ因リ

法典調査會

本案ハ之ヲ直系尊属ニ限定セリ

四 本條力四号ハ既成法典人事編力百四十

條力二號及ヒ力三號ヲ合保シ合セテ雜縁

々々ニテ犯罪ノ性質ヲ明カナラシメタリ

五 本條力五号ハ當事者ノ一方力一ニ力ヲ遺

棄シタル場合ニ関スルモノニシテ表シ遺

尊ノ事実カ已ムコトヲ得サハ事柄ニ基
クトキハ之ヲ以テ離縁ノ事自ト爲サレハ
ヘキ止當ノ理由ナキニ拘ハラズ既成法典
ノ如ク學ニ遺棄ニタルトキト云フニ止
ルトキハ如何ナル場合ヲモ包含スベキハ
勿論ニ之ヲ且遺棄ノ事実カ養家ノ尊屬親
ニ對シ又ハ養家ノ尊屬親ヨリ行ハレタル
トキト爲スハ廢ヤニ失レテ其當ヲ得サハ
ニ因リ亦業ハ遺棄ノ事実カ養家ノ尊屬
ヲ其要意ニ基リキタル場合ニ限定セリ
六 亦條中ニ号ハ養子カ遊蕩情弱ニシテ一
家ヲ維持スルコト能ハサル場合ニ関スル

且子ノニシテ改成法典ノ如ク學ニ財産ヲ浪
費スルコトノミヲ掲リ入ニ止ムトキハ
養子力自巳ノ特有財産ヲ浪費シタル場合
ノ如キニ離縁ノ原因タルヤカラ疑ハシ
ト庶キニ決スル弊アリト因リ本案ハ從來
ノ慣例及ニ實際ノ必要ヲ斟酌シテ存子ノ
如ク之ヲ限定セリ

七 存子存七号ハ養子力逃亡シテ永復帰セ
ザル場合ニ關スルモノニシテ改成法典ハ
之ヲ以テ離縁ノ原因ト認メスト雖モ從來
ノ慣例ニ依シバ多クハ逃亡後三年ヲ経過
セハ離縁ヲ許シタル力ナリ實際上一ニ於テ

ニ養子カ逃亡ニテ永ク復帰セザルニ於テ
ハ之ヲ離縁スルコトヲ得セシムル必要アリ
ルニ因リ本案人總テノ事情ヲ斟酌シテ養
子カ逃亡後三年以上復帰セザルトキハ之
ヲ離縁スルコトヲ許セリ

八 本條牙八号ハ養子ノ生死カ永ク分明ナ

法典調査會

ラサル場合ニ関スルモノニシテ既成法典
ニ其例ナシト虽モ本案ハ從來ノ慣例及ヒ
實際ノ必要ニ基ツキ離婚ノ原因ニ関スル
例ニ倣ヒ養子ノ生死カ三年以上分明ナリ
サルトキハ之ヲ離縁スルコトヲ許セリ

第八百七十三條

(理由) 本條ニ掲ぐるハ六個ノ場合ニ於テ当事者ノ一方ヲシテ離婚ノ訴ヲ提起スルニトラ得セシハハ所以ハ主トシテ此者ヲ保護セシトスル趣旨ニ基ツテモノニシテ故ラ公益上ノ理由ニ基ツテモノニ非サレハ此特別保護ヲ受ルル当事者ニ於テ離婚ノ訴ノ原因タル不良ノ行為ヲ宥恕スル以上ハ強ヒテ此訴權ヲ存セシルル理由ナシトス是レ本條ハ既成法典ニ其例ナキニ拘ハラフス本條ノ規定ヲ設クル所以ニシテ既ニ牙八百十五條牙三項ニ於テ離婚ノ訴ニ関シ本條ト同一ノ規定ヲ掲ケタリ

第八百七十四條

(理由) 改成法曲人事編第九十四條第一項ハ

離婚ノ訴ニ関スル同第九十二條ノ規定ヲ離

縁ニ適用スベキ旨ヲ明示スルモノニシテ本

條ハ本條ノ規定ニ依リ之ニ對シテ多少修正

ヲ加ヘタリト虽モ改ニ離婚ノ訴ニ関スル第

法典調査會

八百十五條第一項及ヒ第九百十二條ニ於テ

本條ト同一ノ規定ヲ設ケ其理由ヲ説明シタ

ルニ因リ此ニ之ヲ畧ス

第九百七十五條

(理由) 本條ハ改成法曲人事編第九十三條

ノ字句ヲ修正シタルニ過キナシハ別ニ説明

ヲ要セス

第百七十三條

(理由) 本條ハ改成法典ノ事編牙百四十二條
ト殆コト同ニシテ概子字句ノ修正ヲ加ヘ
タルニ過ギヤルヲ以テ別ニ說明ヲ要セス
牙八百七十七條

法典調査會

(理由) 本條ハ離婚ノ訴權ノ消滅ニ関スル特
別酌效ヲ采ルルモノニシテ改成法典ニ於テ
斯ノ如ク規定ノ存セザルハ其缺點ト云ハサ
ルベカラズ而シテ本條牙一項ハ離婚ノ訴權
ニ関スル牙八百十七條ト全ク同一ナリト雖
モ養子カ逃亡シ又ハ其生歿カ分明ナラサル

場合ニ於テハ之ト同一ノ現象ニ從テトモ能
ハガハハ別ニ辨明ウ要ヤサハヲ以テ本条ハ
婚ニ第二項及ヒテ第三項ノ規定ヲ設ケ右ノ場
合ニ對シ適當ニ裁奪ノ消滅ヲ規定セリ

第八百七十八條

(理由) 本條ハ改成法典人事編第百四十八條

ト同一ノ趣旨ニ基ツキ離婚ノ訴權ニ関スル
部分ヲ取リテ多少之ニ修正ヲ加ヘタリト虽
モ其理由ハ婚姻ノ無效又ハ取消ニ因リテ縁
組ノ取消ヲ許スルハ第八百七十五條ノ規定
ト異ナル所ナキヲ以テ別ニ設ケセ又

第八百七十九條

(理由) 本條ハ改訂法典人事編第百四十五條
ト同一ノ趣旨ニ基ツテトモ改訂法典ノ如
ク廢テ養子カ戸主ト爲リタル後ハ自ラ離縁
ノ訴ヲ提起スルコトヲ得サル旨ヲモ包含セ
シメサリレハ之レ別ニ言フニ要セサレハナ
リ然レトモ改訂養子カ戸主タルカ故コレヲ
離縁ルルコトヲ許サスト爲スニ於テハ養子
カ隱居ヲ爲スコトニ因リテ戸主權ヲ喪失シ
タル以上ハ之ニ對シテ離縁ノ訴ヲ提起スル
コトヲ得(キハ当然ノ事タリ)是レ即チ
本條ハ婚ニ本條但書ノ規定ヲ附加シタル所
以ナリ)

第八百八十條

(理由) 本條ハ改成法典ニ其例ナシト虽モ実

際ノ事情ト一般ノ條理トヲ斟酌シテ返答ア

ハ當事者ニ扶養ノ義務ヲ負担セシムルモノ

ニシテ改ニ少八百十九條ハ離婚ノ場合ニ於

テ本條ト同ノ規定ヲ設ケタルニ因リ再々

之ヲ説明ス

第八百八十一條

(理由) 養子カ離縁ニ因リテ実家ニ復籍シタ

ルトキハ其身分ハ如何ニ定マル可キモノナ

ハカ改成法典ハ此点ニ関シ別ニ規定ヲ設ケ

ズト虽モ養子ハ改ニ縁組ニ因リテ実家ニ於

ケハ親族間係ヲ脱ニテハモノナレハ甚優籍
ニルニ當リ実家ニ於テ有エバキ身分ハ新ニ
之ヲ取得スルモノナレカ將々縁組以前ノ身
方ヲ回復スルモノナレカニ存キ疑ヲ生セシ
ムハヨトナシトセ又之レ存條ノ明文ヲ掲ケ
ル所以ニシテ存業ハ誰縁ニ因リテ自然ノ状
態ニ復セシムルヲ以テ至者ト認ムルニ因リ
養子ハ即チ実家ニ於テ有セシ以前ノ身分ヲ
回復スルモノト爲セリ然レトモ表ニ斯ノ如
クナレバ養子ノ誰縁前ニテ三節ノ取得ニテ
ハ權利ハ養子ノ身分回復ニ因リテ往々優實
セシムルコトアリテ存業ハ特ニ存條但

書ノ規定ヲ註テ以テ才三者ノ權利ヲ確保シ
實際上ノ弊害ヲ豫防セリ

才ハ百八十二條

(理由) 婿養子タルト普通ノ養子タルトヲ問
ハコ家女ト婚姻シタル養子ヲ離縁シタルカ
為ノ當否離婚ノ結果ヲ生セザンコトハ勿論

法典調査會

タルノミナラズ從來ノ慣習ニ依リハ家女カ
往々離縁シタル養子ニ自添シ其夫ノ家ニ入
ルコト亦カラスニテ夫婦ノ情義上又當サニ
勉ムベキ事タルベシ只家女カ其父母又ハ夫
ノ系譜セザルニ拘ハラヌ夫ノ家ニ入ラント
スル如キハ親子夫婦ノ關係上許スベカラザ

ハコトタルニ因リ本条ハ既成法典ニ其例ナ
シトモニ從來ノ慣習及ビ實際ノ事情ヲ斟酌
シテ本條ノ規定ヲ設ケ家女ト婚姻ヲ爲シ
タル養子ヲ離縁シタル場合ニ於テ家女ハ其
父母及ビ夫ノ承諾ヲ得テ其夫ノ家ニ入ルコ
トヲ得ベキ旨ヲ認メタリ然レトモ右ニ在リ

法典調査會

家女ニシテ其家ノ推定家督相続人タルニ拘
ハラズ他家ニ入ルコトヲ得セシムルニ於テ
ハ一家ノ存立ニ影響ヲ及ビテ家ヲ重ニスル
立法ノ本旨ニ悖ルヲ以テ本條ハ特ニ本條但
書ノ規定ヲ設ケ之ニ依リテ一家ノ存立ヲ妨
グハコト勿カウニメタリ

茅八百八十三條

(理由) 夫婦カ養子ト為リ又ハ養子カ養親ノ

他ノ養子ト婚姻ヲ為シタル場合ニ於テ妻ノ

エテ離縁ニテ養家ヲ去ラシメシトスルコト

ハ實際上性々見ル所ニシテ法律上固ヨリ之

ヲ禁止スル理由ナシト雖モ若シ此場合ニ於

法典調査會

テ妻カ養家ヲ去リテ夫ハ養家ニ止ルニ拘ハ

ラス婚姻ハ尙ホ存続スルモノト為セバ夫婦

其籍ヲ置キシ其居ヲ別ニスル結果ヲ生シ婚

姻ノ本旨ニ悖ルニ至ルベシ蓋シ右ノ場合ニ

於テハ夫ノ養家ニ對スル縁組關係ト其妻ニ

對スル夫婦關係トハ兩立スルコトヲ得サル

モノニシテ孰レカ一方ノ關係ヲ断スモノサ
ルヘカラスト云モ法律上豫メ或一方ヲ指定
シテ夫ノ自由ヲ拘束スルコトハ一層人情ニ
及レ其當ヲ得サニ因リ本案ハ即チ本條ノ
規定ニ依リ縁組關係ヲ断ツヘキカ將々夫婦
關係ヲ断ツヘキカニ存キ夫ノ選擇權ヲ認め

法典調査會

亦條ノ場合ニ於テハ夫ハ離婚又ハ離婚ノ訴
ヲ提起シテ孰レカ一方ノ關係ヲ消滅セシム
ベキモノトナセリ然レトモ茲ニ此場合ニ於
テ協議ニ依リテ離婚又ハ離婚ノ結果ヲ收ム
ルコトヲ得ルニ於テハ敢テ其訴ヲ起スニ及
ハサハコトハ更ニ言フヲ要セザル所ナルベ

法典調查會